

DIALOGUE NEXT DOCUMENT

F/T20 ダイアログ・ネクスト ドキュメント



FESTIVAL / TOKYO

フェスティバル / トーキョー 20 主催プログラム

教育普及プログラム

INTRODUCTION

フェスティバル／トーキョー（以下、F/T）では、次世代を担う人材の育成を目的とした教育普及プログラムを実施しています。本書でご紹介する「ダイアログ・ネクスト」は今年で3年目を迎える学生を対象とした対話プログラムで、演目の鑑賞、アーティストとの対話、参加者同士のディスカッションやワークショップを通した多様な価値観との出会いを目指しています。

F/T20 ダイアログ・ネクストは新型コロナウイルス感染症流行下で開催されたフェスティバルの会期に先立ちスタートし、全7回のうち2回がオンラインで実施されました。その他のワークショップ・鑑賞対話等は感染症対策をとりながら対面で行われ、それぞれの発言に注目が集まりやすいオンラインと、場の雰囲気を共有しながら進めるリアルな対話が相互に作用し、回を追うごとにコミュニケーションが豊かになっていきました。

本書では、プログラム内容についての記録とともに、講師からの寄稿や参加者からのレポートをご紹介します。

CONTENTS

- 01 事業概要
- 03 全体監修：中尾根美沙子 寄稿
- 06 プログラム詳細
- 14 参加者レポート

ABOUT

ダイアログ・ネクストとは

フェスティバル演目の鑑賞、アーティストとの対話、ワークショップ、参加者同士の交流とディスカッションからなる全7回・約1ヶ月間のプログラムで構成されました。

文化芸術を通して社会を見つめるための「対話」を軸にした学生向けプログラム。様々な分野から参加した学生たちが、同年代の仲間やアーティストとの交流を通して多様な価値観に出会い、他者へ伝える言葉を獲得していく学びと実践の場です。



事業概要

日程 2020年10月10日[土]～11月8日[日]

会場 旧真和中学校、東京芸術劇場、あうるすぽっと(荒天のためオンライン実施)

全体監修 中尾根美沙子

ワークショップ講師 三浦直之(口ロ主宰)

応募条件 学生であること(大学生、大学院生、専門学生)
原則、全7回のプログラムすべてに参加できること(応相談)
終了後、A4 1枚程度のレポートを提出できること

参加費 5,000円 ※鑑賞演目のチケット代を含む。※交通費、食費、宿泊代は含まない。

ゲスト 村川拓也、白神ももこ、モハマド・ファレド・ジャイナル、ショーン・チュア

参加者総数 12名+インターン3名

参加大学 青山学院大学国際政治経済学部国際コミュニケーション学科/桜美林大学芸術文化学群演劇ダンス専修
東京外国語大学国際日本学部/東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科
東京藝術大学美術学部建築科/東京農工大学農学部地域生態システム学科/桐朋学園芸術短期大学芸術科演劇専攻
成城大学文芸学部芸術学科/日本大学芸術学部演劇学科/横浜市立大学理学部理学科

SCHEDULE

1 キックオフミーティング F/Tディレクターとの対話

日程 10/10[土] 13:00-15:30

会場 オンライン実施

ゲスト 長島 確

2 演劇ワークショップ

日程 10/11[日] 13:30-17:30

会場 F/T椎名町オフィス、及び椎名町駅周辺

講師 三浦直之(口ロ主宰)

アシスタント 奥山三代都(口ロ制作)

3 モモンガ・コンプレックス 『わたしたちは、そろっている。』 ストリーミング配信視聴 感想共有会

日程 10/25[日] 11:30-15:00

会場 F/T椎名町オフィス

4 モモンガ・コンプレックス 白神ももことの対話

日程 10/29[木] 16:30-19:00

会場 F/T椎名町オフィス

ゲスト 白神ももこ(モモンガ・コンプレックス主宰)

5 村川拓也『ムーンライト』 観劇 村川拓也との対話

日程 11/1[日] 15:00-18:30

会場 東京芸術劇場シアターイースト

ゲスト 村川拓也

6 『Berak』鑑賞 (※事前に視聴) テアター・エカマトラとの対話

日程 11/3[火・祝日] 13:00-17:00

会場 オンライン実施

ゲスト モハマド・ファレド・ジャイナル(テアター・エカマトラ芸術監督)、ショーン・チュア(ドラマトウルク)

通訳 相磯展子(Art Translators Collective)、中野美緒

7 まとめの会

日程 11/8[日] 11:00-18:30 ※途中休憩を含む

会場 F/T椎名町オフィス

ゲスト 長島 確・河合千佳

「ダイアログ・ネクスト」に寄せて

全体監修：中尾根美沙子

当たり前だったそれぞれの日常が大きく変わり始めていた頃、フェスティバル/トーキョー 20 の開催が決定したことを知った。公式HP上でディレクターズ・メッセージを読み、心動かされたことを今でも鮮明に覚えている。「想像力どこへ行く？」というテーマとともに語られていた「からだに制限がかかっても、想像力とともに開けられるドアがあるし、想像力が生み出す現実があります。」という言葉に力強さを感じ、去年に引き続き担当することになったダイアログ・ネクストの場づくりにワクワクしたことが、私にとってのF/T20ダイアログ・ネクストのはじまりだった。

参加学生とはじめてコミュニケーションをとったのは、思いがけずオンラインとなったが、ダイアログ・ネクストに応募した動機には、一人一人の想いや深い問いがあり、それを他者に伝える姿勢はとても真っ直ぐで、オンライン上からも、参加者それぞれが伝えたい言葉に溢れている印象を受けた。参加者同士の関係性作りを目的としたワークショップでも、グループワークに夢中で取り組んでいる参加者の様子から、大学の授業もオンラインとなり人とのコミュニケーションが激減している毎日の中、リアルに人とコミュニケーションすることの面白さを取り戻しているような気がした。

今回の参加者にとってベストな場づくりは何なのかを探っていた回で、とても印象的なことがあった。当初イメージしていたプログラムでは、参加者の緊張も考慮し、鑑賞後に個人でじっくりと時間をかけて言葉を整理して、徐々に対話につなげていこうとプログラムを考えていた。そこには、思考の幅を広げるきっかけとなるであろう「おりがみ」などの道具を取り入れることも検討していた。対話経験の少ない学生の参加者にとって、鑑賞直後の複雑な感情から自分の言葉を作るためには、何らかの取り組みやすくなる工夫をする必要性を感じていたからだ。しかし、参加者の様子から、「誰かと話したい」という強い感情を感じ、考えてきたプログラムを全て白紙にし、共有から対話に向かうシンプルなプログラムに組み換えた。もともと、思考を巡らせて自分の想いを言葉にすることに慣れていた学生も多かったのかもしれない。しかしそれだけではなく、コロナ禍だからこそ、人とのコミュニケーションを潜在的に求めているようにも見えた。人と話す機会という意味でも、他者を通して自分について考えるという意味でも、学生同士が向き合い、語り合う場の重要性を改めて実感した回となった。

コロナ禍ということもあり、新しい形での開催となったF/T20ダイアログ・ネクスト。振り返ってみると3回の観劇はどれも違ったスタイルのものだった。初回のモモンガ・コンプレックス『わ

たしたちは、そろっている。』の観劇はストリーミング配信をオンタイムで視聴、2回目の『ムーンライト』は劇場での観劇、そして最後の『Berak』はオンデマンド配信での観劇となった。開始前は、劇場での観劇回数が減ってしまったことをF/T事務局の方々とともに心配していたが、結果的に多様な観劇方法を味わえたことは、参加者にとって面白い経験になったと感じている。

オンラインとリアルの観劇時の感覚の違いを体感し、作品内容からの影響だけではなく、観劇方法の違いからも感情が揺さぶられ、「演劇とは何なのか?」「見る一見られるの関係性」など、各々の問いが生まれていった実感がある。

参加者各々の問いに深まりを与えたのは、「アーティストとの対話の時間」だったように感じる。アーティストの対話について、昨年は対話まで持っていく難しさを感じることも多かった。参加者間での対話は成立しても、アーティストを交えての対話となると、時間的制約などで思うように場が進まず、反省点や課題も多かった。しかし今回はアーティストとの対話の時間こそ、非常に充実したと感じている。アーティスト、学生問わず、異なった価値観をぶつけ合い、お互いに問いかけあい、誰かの言葉に触発されて、自分の考えが変化しはじめるといった「対話」が確実に生まれていた。いくつかの要因はあると思うが、アーティストも参加者もお互いに歩み寄りながら語り合えたことは大きかった。作品をどのように鑑賞し、何を感じて、何を考えたのか、一人の意見に皆が真摯に耳を傾けた。アーティストは、参加者からの質問に、言葉を選びながらじっくりと返答してくれた。そのような良質な対話の場そのものが、学生の彼らにとっては刺激的で、言葉のやりとり以上の価値を生み出していたのではないと思う。

改めてF/T20ダイアログ・ネクストが無事に開催できたことを嬉しく思う。F/T事務局の方々の諦めずにどうにか実施しようという熱意と地道な努力があったからこそ、この場が実現できたのだ。開催できることが当たり前ではなかった場を経験したからこそ、今改めて「対話の場の必要性」を強く感じる。F/T20ダイアログ・ネクストに参加してくれた学生が、今後、ここで得た学びや出会い、気づきを、いつかどこかで自分なりに活かして欲しいと切に願っている。

中尾根美沙子

青山学院大学社会情報学部プロジェクト准教授／ワークショップデザイナー育成プログラム プロデューサー・講師。2008年より、ワークショップデザイナー育成プログラムの立ち上げに携わり、プロデューサーとしてカリキュラム設計、eラーニング制作を行っているかたわら、学習環境デザインの研究に携わる。著書には、「ワークショップと学び」2,3巻（共著）など。



PROGRAM

F/T20 ダイアログ・ネクスト全7回の活動の様子をご紹介します。



1 キックオフミーティング

会場 ——— オンライン (Zoom)
ゲスト ——— 長島 確 (F/Tディレクター)

13:00 イントロダクション
ファシリテーター・F/Tスタッフの挨拶と本プログラムの企画主旨を説明。

13:20 アイスブレイク
＜4分割自己紹介＞
「名前と呼んでほしいニックネーム」「普段やっていること」「ダイアログ・ネクストに参加した理由」「実は○○ヲタクです!」というテーマに沿ってA4用紙に書き込み、自己紹介を行った。
Zoomのブレイクアウトルームで3人、4人のグループを作成、3回メンバーの入れ替えを行い、少人数での対話により少しずつ参加者のことばが引き出されていった。

14:00 ディレクターズトーク
F/Tディレクターの長島 確より、フェスティバル/トーキョーについてレクチャーが行われた。
「集まらない」いまの情勢下でF/Tが掲げるテーマについて焦点をあて、特に東京で開催される都市型のフェスティバルであること、『トランスフィールド from アジア』をはじめとする長島・河合体制からアップデートされたプログラムについて、長島の持つ問題意識を交えて聞く機会となった。

14:40 質疑応答
「まずはチャットに、質問でも感想でも良いので感じたことを短く書き込んでみてください。」という切り口から参加者の言葉を引き出し、ディレクターと対話を行う形で個人の気になった点や興味関心を掘り下げていった。
長島の提示した「芸術は政治や経済と別の通路を作ることができる」というトピックは特に多くの関心を集め、芸術と社会のつながりについて積極的なディスカッションが行われた。

15:20 感想共有 & 次回へむけて
ディレクター退出後、参加者同士で今回の短い感想共有の時間が取られた。
翌ワークショップの説明などを行い終了した。



2 演劇ワークショップ

会場 ——— F/T 椎名町オフィス、及び椎名町駅周辺
講師 ——— 三浦直之 (口口主宰) アシスタント ——— 奥山三代都 (口口制作)

13:15 参加者集合 受付
13:30 説明・アイスブレイク
参加者の大学生活や授業について、三浦直之さん (口口主宰) の学生時代についてのお話などを交え話しやすい環境づくりが試みられた。またワークショップについての説明が行われた。

14:00 ワークショップ
三浦直之さんによる演劇ワークショップ。
参加者は5名ずつのグループに分かれ、まち歩きをしながら架空の人物「太郎くん」と「花子さん」との思い出を捏造、ものがたりが立ち上がっていく過程を体験した。協力して創作を行う中、少しずつ緊張がほぐれユニークな意見が交わされる様子がみられた。

ワークショップ前半
＜それぞれの「思い出」づくり＞椎名町周辺、公園や高架下などの5箇所に参加者一人ひとりが「太郎くん (20歳) との思い出」「花子さん (40歳) との思い出」といった設定を受け取り、各スポットで架空の人物との思い出を創作。
＜「思い出」の発表＞5つのスポットをツアー形式で回って行き、それぞれが作り上げた「思い出」を他の参加者に向けて語った。

休憩

ワークショップ後半
＜年表制作＞室内に戻り、グループでの共同作業が行われた。「太郎くん (20歳) との思い出」「花子さん (40歳) との思い出」といった各年代の間にその人物に起こった事象を創作し、年表として模造紙上に埋めていった。

＜ものがたりの発表＞各グループが立ち上げた架空の人物の一生を発表し、疑問や感想を共有する時間となった。

17:10 まとめ、質疑応答
場所からものがたりを創作することについて、三浦さんご自身の震災を経験して以降の創作手法の変化などのお話を交えたワークショップのまとめが行われた。参加者からは「オンライン演劇は演劇なの?」「三浦さんの扱う言葉はどんなところがルーツになっている?」「難しい演劇作品とはどうやって向き合っていたらいいの?」といった質問が飛び交い、交流と対話の機会となった。

17:30 次回にむけて

三浦直之
口口主宰。劇作家。演出家。2009年、主宰として口口を立ち上げ、全作品の脚本・演出を担当する。自身の摂取してきた様々なカルチャーへの純粋な思いをパッチワークのように紡ぎ合わせ、様々な「出会い」の瞬間を物語化している。2015年より、高校生に捧げる「いつ高シリーズ」を始動。高校演劇のルールにのっとった60分の連作群像劇を上演し、戯曲の無料公開、高校生以下観劇・戯曲使用 無料など、高校演劇の活性化を目指す。そのほか NHK 脚本提供、歌詞提供、ワークショップ講師など、演劇の枠にとらわれず幅広く活動中。2016年『ハンサムな大悟』第60回岸田國士戯曲賞最終候補作品ノミネート。2019年脚本を提供したNHKよりドラマ『腐女子、うっかりゲイに告 (コク) る。』で第16回コンフィデンスアワード・ドラマ賞脚本賞を受賞。



Photo: 三浦直之

③ モモンガ・コンプレックス『わたしたちは、そろっている。』 ストリーミング鑑賞 / 感想共有会

会場 ————— F/T 椎名町オフィス

【作品について】 振付・演出家、白神ももこのもと、シュールな感性と叙情をないまぜにした独自の作品世界を展開するモモンガ・コンプレックスによる「観察型ミュージカルのダンス・パフォーマンス」。集まることが当たり前ではなくなった今この時にこそ、「上演」や「個と全体／集団」の意味を、ユーモアを持って問い直そうとする。

11:30 集合・レクチャー

事務局小倉より、白神ももこを中心としたダンス・パフォーマンス的グループ「モモンガ・コンプレックス」の紹介と作品について説明が行われた。

12:00 作品鑑賞

『わたしたちは、そろっている。』第一部「ゆらぎ」のストリーミング配信を鑑賞。

13:15 共有会

＜グループでの共有＞参加者を3つのグループに分け、共有が行われた。まずそれぞれが感じたこと、もやもやしたことなど、共有したいことを自由に紙面上に書き出す個人的な作業に時間がとられ、その後各自のキーワードを元にした対話がグループをシャッフルして2回行われた。グループでの共有では笑いが起こることなどもあり、終始和気あいあいとした雰囲気で行われた。

休憩

＜参加者全員での対話＞ファシリテーターから対話について説明を受け、全体での対話が行われた。まず批判ではなく違いを楽しむこと。鑑賞対話については「作品中心対話」「鑑賞者中心対話」「アーティスト中心対話」の分類があり、それらの分類が重なりあうダイアログ・ネクストの特色について共有された。参加者たちはそれぞれが対話に乗せたい「問い」を紙に書き出し床に置いて、問いを囲んだ車座での対話を行った。「見る・見られるとはどういうことなのか?」「知識の有無による受容の差異について」、舞台装置への指摘など、他者の多様な観点からの問いは気付きと言葉を引き出し、終了時間いっぱいまで尽きることなく話し合われた。触れることができなかった多数の問いについては次回の白神ももこさんとの対話会に向け持ち越されることとなった。

14:55 リフレクションシートの記入

今回対話された内容や、自分の考えを振り返ることを目的とし、それぞれがリフレクションシートに記入した。

15:00 次回へむけて



④ モモンガ・コンプレックス 白神ももこさんとの対話

会場 ————— F/T 椎名町オフィス

ゲスト ————— 白神ももこ(モモンガ・コンプレックス主宰)

16:30 集合・グループディスカッション

まずは参加者同士で3人ずつのグループになり、前回ストリーミング鑑賞したモモンガ・コンプレックス『わたしたちは、そろっている。』について意見交換を行った。作品鑑賞から少し時間が空いて1度自分で意見を整理する時間があったということもあり、各々が作品の解釈や考え方をより深めた状態でのディスカッションとなった。

17:00 白神ももこさんとの対話

白神ももこさん(モモンガ・コンプレックス主宰)との対話が行われた。車座になり、まずは白神さんより作品の創作背景について、制作過程や短歌の魅力、コロナ禍で感じた作品との向き合い方などをレクチャー。「トップダウンにならないよう、チームの”弱いお父さん”でいる」といった独特ながら伝わりやすい言葉で、鑑賞後の作品理解を深める時間となった。その後の対話の中では舞台美術や参加者が実際に投稿した短歌についてなど、多角的な視点から問いを共有、それぞれが自分なりの作品との向き合い方を模索していった。

休憩

18:30 リフレクションシートの記入

対話を終えて感じた事を整理し、参加者自身の言葉にする作業を行った。

18:40 ラップアップ

再び車座になり、それぞれが「今感じていること」を発表。白神さんが集団創作を行う上で配慮していること、出演者に対するリスペクトの持ち方、言葉や作品に対する価値観などを振り返り、改めて作品について考えたことなどが共有された。また、他者と意見交換をする事で様々な角度から作品を捉えることができたという意見も多く挙がった。

19:00 次回へむけて

白神ももこ

桜美林大学文学部総合文化学科卒業後、「モモンガ・コンプレックス」を結成、全作品の構成・振付・演出を担当。無意味、無駄を積極的に取り込み、ユニークで豊穡な身体、空間を立ち上げる。フェスティバル／トーキョーではF/T モブ (12) の振付、F/T14『春の祭典』の総合演出・振付を手がけている。近作に、キラリ☆ふじみダンスカフェスペシャルコラボレーション『幻想曲』(コンセプト・ディレクション／20)、モモンガ・コンプレックス『となりの誰か、向こうの何か。』(19) など。富士見市民文化会館キラリ☆ふじみ芸術監督。



Photo: 北川博晴

モモンガ・コンプレックス

白神ももこと、衣装デザインや保育士、イラストレーター、パリストなど、それぞれに異なる職能を持つ多彩なパフォーマーで構成される「ダンス・パフォーマンス的グループ」。2005年に活動を開始、日常生活の中の些細な出来事、個人史、小さな願望から着想したダンス作品を発表する。シンプルでくだらないことの中に本質を見出し、親しみやすさと人生のぬかみを共存させた作品群は、コンテンポラリー・ダンス界でもひととき異彩を放つ。



Photo: 北川博晴

5 > 村川拓也『ムーンライト』観劇・対話

会場 ————— 東京芸術劇場シアターイースト

ゲスト ————— 村川拓也

【作品について】 村川との対話とピアノの発表会の形式をとった本作の主人公は、ベートーベンの「月光」に惹かれてピアノを始めた、京都に暮らす70代の男性。質問に導かれ、音楽との出会い、20歳から今日まで続く目の病とのつきあいを始めとする人生の断片が浮かび上がってくるなか、さまざまな世代のピアノ演奏者たちが登場、彼の記憶を彩る曲を演奏する。

14:30 集合
15:00-16:15 観劇

休憩

16:50 感想の共有
村川拓也『ムーンライト』の作品を各人が振り返る時間をとった後、参加者同士で3人ずつのグループにわかれ感想を共有した。

17:20 村川さんとの対話
はじめに村川拓也さんより『ムーンライト』の制作背景について、主演の中島さんとの出会いから、作品の着想や構想の変遷などについてレクチャー。ドキュメンタリー演劇と称される村川作品は、ほとんどの参加者が「初めて触れるジャンルの作品」である。そのため参加者からの質問を中心に話題が広げられた後半では、視覚障がいを持つ70代の男性が介助を受けながら舞台に立つ今作について、出演者との関係や演出に関する疑問が数多く挙がった。「ピアノが最後まで弾けないまま終わることが衝撃だった」「なぜ目の見えないひとのマイクを何度も直したのか」など批判的にも取れる質問が投げかけられる中、「すべての演劇は残酷だ」という村川さんの言葉から場の空気が変わる。対話を重ねるなかで「演劇の残酷さとうどう向き合うのか」、「村川さんが目指す『演劇』はどのようなものか」、そしてダイアローグネクストで繰り返し議論されてきた「演劇とは何か」という問いまで話がふくらんだ。唯一の劇場での観劇だったことも重なり、参加者それぞれが演劇のイメージについて新しい視点を得る機会となった。

18:20 ラップアップ
村川さんとの対話を経てのラップアップは、観劇後に行われた感想共有から大きく変化のあるものとなった。参加者からは「対話の前後で作品の捉え方が変わった」という声が多く上がり、また自己の日常を振り返って「障がい者・健常者」という概念についても気づきや変化があったことが述べられた。

18:30 次回へむけて

村川拓也

演出家、映像作家。映像、演劇、美術など複数の分野を横断しつつ、ドキュメンタリーやフィールドワークの手法を用いた作品を発表する。介護する／される関係を舞台上で再現する『ツァイトゲーバー』(F/T11 公募プログラム)は、HAU(ベルリン)の「Japan Syndrome Art and Politics after Fukushima」(14)を始め国内外で上演を重ねている。16年東アジア文化交流使(文化庁)として中国・上海／北京に滞在。18年ロームシアター京都「CIRCULATION KYOTO- 劇場編」にて『ムーンライト』(助成：公益財団法人セゾン文化財団)初演。フェスティバル／トーキョーには『言葉』(12)以来の参加となる。京都芸術大学舞台芸術学科・映画学科非常勤講師。



6 > テアター・エカマトラ『Berak』鑑賞対話

会場 ————— オンライン(Zoom)

ゲスト ————— モハマド・ファレド・ジャイナル(テアター・エカマトラ芸術監督)、ショーン・チュア(ドラマトゥルク)

通訳 ————— 相磯展子(Art Translators Collective)、中野美緒

【作品について】 仏教思想を引用し、自殺や病、「死」という運命に対処する家族の姿を描いたチョン・ツェシェン(The Finger Players)の戯曲『Poop!』を、ムスリム家庭を舞台に置き換え再創造した映像演劇作品。ファンタジックでユーモアにあふれた想像を交えて描かれる男の魂と娘との対話、妻、母との関係は、彼らが暮らすコミュニティの死生観、家族観をありありと照らし出していく。

13:00 集合・アイスブレイク
キックオフミーティング以来のオンラインでの開催となったため、はじめに本日の流れについての説明と簡単なアイスブレイクの時間がとられた。

13:15 感想共有
参加者が、テアター・エカマトラ『Berak』を鑑賞して感じたことを全体チャットで共有。独特の映像に関することや、死生観に関することが多く挙げられ、その中から、「映像手法」「死生観と宗教」がキーワードとしてピックアップされた。<キーワードトーク>4人グループになり、自由な意見交換の時間がとられた後キーワードをもとにした対話が行われた。作中で描かれるテーマや表現が独特なことから、参加者は考え込むように沈黙する場面も多くあった。

13:50 問いを見つける
「映像手法」「死生観と宗教」のキーワードを使った対話を終え、それぞれのグループから自分たちでさらに発展させたい問いを立てた。 ●自殺は悪か否か ●汚いとされるもの(汚物や、死)に対してのとらえ方について ●(自殺やシリアスなテーマを)どうとらえるか? どう伝えるか? という問いが出された。

休憩

15:30 アーティストとの対話
テアター・エカマトラから、演出家のファレドさんとドラマトゥルクのショーンさんが参加。自己紹介の後、参加者を2つのグループにわけ、ゲストと通訳が各グループに1名ずつ入り対話がスタートした。ファレドさんからは「ただ道德的に良いものを作るのではなく、挑戦的な作品を作ることで鑑賞者に対話してもらうことや考えてもらうことを期待している」という話があり、参加者からは、様々な文化を超えてクリエーションを行う意味や、作品内の表現に関すること、死生観、宗教観に関することまで、多様な質問や疑問が発せられた。ゲストのお二人が入れ替わる形で30分ずつ対話が行われたが、海外のアーティストと通訳を交えながらの対話は刺激的でありながらもあっという間の時間となった。

16:50 感想共有 & 次回にむけて
テアター・エカマトラのお二人が抜けられたあと、短い感想共有とリフレクションシートの記入を行った。

テアター・エカマトラ

東南アジアの伝統的な演劇様式と現代的なテクニックを融合させた「現代的で実験的なマレー演劇」の開発を目指し、1988年に創設された。モハマド・ファレド・ジャイナル(芸術監督、パフォーマー、演出家)のもと、シンガポールの多様な民族、文化、言語にスポットライトを当てるとともに、政治的な課題にも大胆に切り込む作品を上演する。次世代育成のためのトレーニングプログラムや演劇祭の主催のほか、マレー語戯曲のアーカイブプロジェクトも展開している。



7 > まとめの会

会場——F/T椎名町オフィス

ゲスト——長島 確(F/Tディレクター)、河合千佳(F/T 共同ディレクター)

11:00 集合

11:05 経験を丁寧に振り返る

これまでのダイアログ・ネクストを振り返り、各個人が気持ちの波を「テンショングラフ」に落としこんだ。その後、3つのグループで相互に発表し質問し合う時間がとられた。意見共有から新たに発見したことや、お互いに「なぜ」で掘り下げ感じたことを記録した。

12:00 グループワーク

3つのグループに分かれ、発表会に向けてテーマづくりを行った。

休憩

13:30 語って・作って・こわしてタイム

「演劇を見て言葉にして対話すること」「対話を介した言葉の発信、受け取り、変化」「見る・見られるの関係性」などのテーマを軸に話し合いが進められた。発表形式は登壇者に委ねられていたため、発表方法についても話し合われた。

15:30 発表会

各グループが全員の前で発表。グループごとに個性的な表現方法がとられ、和気あいあいとした雰囲気が進められた。発表後は長島・河合とスタッフも交え、3つのテーブルに分かれた共有の時間となった。

グループ①：「私たちの対話」 模造紙を利用したプレゼン形式で行われた。観劇する経験のなかで、考え、言葉にし、対話をするというループの重要性について説明し、具体案として感想共有会つきチケットの販売なども挙げられた。

グループ②：「対話を対話」 より良い対話を作るために必要なマインドセットが語られた。模造紙で自分の感じたことを言葉として表現するまでの3つの段階が図解された。それを踏まえて、対話で言葉になりきれないものをシェアする重要性について、紙をまとめる・絡まった紐をほどく・パズルのピースをつなげるなどの行為で実演した。

グループ③：「見る・見られるの関係性」 発表中の「見る・見られるの関係性」をあいまいにするために、対話を再現する形で登壇者も含めて全員が大きな円になって座するという工夫がされた。日常で経験する見る・見られるの暴力性、演劇と映画の暴力性の違い、演劇とお笑いの共通項などについて話された。

発表を通して長島からは、F/Tでは言葉になりきらない「ぐちゃぐちゃ」を大切にしてお発点を見つけていること、フェスティバルを通して生まれる膨大なコミュニケーションを止めないことの重要性についてフィードバックがあった。

17:30 クロージング

紙粘土を用いて、これまでのダイアログ・ネクストを振り返って感じることを形造る時間がとられた。参加者それぞれが将来の展望、自分の脳内、思考の変化、大切にしたい価値観などを思い思いに発表した。ファシリテーターの中尾根さんからは最後に「答えをたくさん持つことを目指すのではなく問い続けられるものを持ち続けて、人生を豊かにしてほしい」というコメントがあった。

18:30 終了



「ぐちゃぐちゃ」

A.M

「なんて贅沢な時間だったんだ、..。」とダイアログ・ネクストを終えて、対話の中でたくさんメモしたノートを見返して改めて感じている。

普段から芸術に触れる機会が多く、刺激的な作品に出会うたびに色んな感情が動かされ、たくさん思考を巡らせてあれやこれや考えたり、感じたままの感情を大事にしたり、そんな事を色々な場面でしてきた。でも思い返せばそのほとんどが自分1人の中で行われてきたように思う。もちろん友達と一緒に観劇に行ったり美術館に行ったりした時などは相手の感じたことを聞くことはあるが、「対話」という所まではした事がないのかもしれない。そう感じたのはある意味初めてちゃんとした「対話」というものをこのダイアログ・ネクストでしたと思ったからだ。

年齢も普段何をしているのかもよく知らない初対面の人たちといきなり対話をするなんてどうなるのかと、最初は緊張とワクワクが半分ずつだった。でも回を重ねるごとにワクワクが止まらなくなっていった。

このプログラムに参加しようと思った理由も価値観も生活も全く違うからこそ、同じものを見てもそれぞれのフィルターを通す事で正反対の意見が出たり、共感したり、色んなことが起こった。たとえ意見が全く違って、その人の考えをまず受け入れる。そこから自分の価値観とすり合わせて、自分1人では考え付かなかったような新たな発見がある。それをじっくりじっくり何時間も時間をかけて、つくってこわしてまたつくってを繰り返す。そうしていくうちに私の頭の中はどんどんとぐちゃぐちゃになっていった。ぐちゃぐちゃと言うと悪

く聞こえるかも知れないが、全くそうではない。出会った人たち1人1人の素敵な個性が、私の脳内を丁寧に丁寧に、ほぐすようでほぐしてくれなくて、でもほぐしてくれるような不思議な感覚。茹で上がった熱々のパスタに色んな味の Pastaソースをかけて、全体に行き渡るように混ぜ合わせ、ほぐしながら絡めていくみたいな。それが美味しいのかはわからないけれど、そんな事が脳内で起こっているような感じ。結果的に脳内はぐちゃぐちゃだけどそれでいい。それがいいって思った。

そのおかげでぐちゃぐちゃの中から大切なキーワードがポンポン飛び出して、最初感じたこと、考えていた事とは全く違う議題とピーンと糸が張って繋がったり、切り刻まれていたものを縫い合わせる事が出来たり、予想もしてなかったような事が生まれたりした。それがまた1番最初に感じた純粋な感覚に戻ってくる事もあり、その作用がものすごくおもしろかった。

私は毎回終わった後、一駅先の駅まで歩く事にした。その駅に着くまでの約15分間、その日ぐちゃぐちゃにされた頭の中を、次は自分の手で丁寧にぐちゃぐちゃにしていこうと思った。そこからまた新たな気づきや発見があって、次のダイアログの日がもっと楽しみになった。

こんな体験をしたのは生まれて初めてだったかも知れない。本当の「対話」ってこれなんだ！って実感した。もっともっと「対話」がしたい。そこで生まれたものをアウトプットして何か形にしたい。そしてまたあのぐちゃぐちゃを感じたいと思った。

「 」

S.S

私は高校生のころから演劇を始めました。当時の私は演劇を無条件に信頼していたし、演劇に対して希望を持っていました。しかし大学に通い3年ほど演劇を学び大学外でも演劇を観たり携わったりしながら過ごしていくうちに高校生の頃より“演劇”というものを素直に受け入れることが出来なくなっていき、“演劇”というもののあらゆることが分からなくなっていきました。そして“コロナ”というものの存在によって演劇というものの脆さを目の当たりにし、ますます演劇のことがわからなくなり同時にどうしようもなく辛くなりました。演劇のことを考えずにほかのことを考えよう、と思っても日常と演劇はどこか地続きで離れ難く、ならばもういっそのこと、とことん“演劇”というものを考えるしかないのではないかと思い始めました。

「ダイアログ・ネクスト」の募集を見たのはそんなときで同世代の他者と対話することで自分の価値観の外にあるところから“演劇”を考えることが出来るのではないか、と思い参加をしました。

今このレポートを書いている私は11月27日の17:41で、ダイアログ・ネクストを終えてから、1か月も経つのかと驚いています。全7回どの回もすごく印象的で、参加者の方との対話も、アーティストの方々の対話も自分にとってすごく新鮮でした。「作品を観る」という言葉の中に、「同じ作品を観た他者と話す」ということも含まれていたのだと感じるぐらい対話を通じて得られたものがあまりにも大きく、「話す」ということの尊さに気づかされました。単に言葉と言葉のやりとだけでなく、その言葉の向こう側にあるものを意識する日々でした。

そしてこの「ダイアログ・ネクスト」では体験した事柄や話したことが回を重ねていくごとに連なり、ダイアログ・ネクスト以外にも大学での出来事やバイト先での出来事が連鎖し、自分の中で弾けて腑に落ちていくような感覚があって、すごく面白かったです。

そういった事柄の中で特に興味深かったのが、パフォーマーと観客の関係性についてです。初回のWSで三浦さんが「演劇は観客の暴力性があるから唯一無二の表現であり、おもしろい」ということをおっしゃっていて自分の中でその言葉が引っかかっていた。そして回を重ね作品を鑑賞した際の対話や、アーティストの方々の対話を経て、観客の暴力性と、表現という暴力性が拮抗した状態で紡がれ、どちらも安全ではない。生身の身体と身体、同じ空間で同じ時間を過ごすこと。つまり観客の能動性と表現者の能動性がぶつかって、結果的に“演劇”と呼ばれるものになっているのではないか、表現者も観客も常に無関係でいられないからこそ面白いのではないか、と思いました。

演劇は粘土みたいなもので、その時々によって形を我々が作っていくことが出来る。絶対的なものではなく、流動性を帯びているものだと思います。自分が“演劇”に対してわからないという感情を抱くことは至極当たり前のことでそこをゆくりと考え続けていきたいなと思いました。

今は18:33で、もうすぐ字数の制限を迎えてしまっ自分の記憶の8分の1ぐらいのことしか書きませんが、このダイアログ・ネクストの記憶を大切に持ち続けて、また参加者の方にどこかでうっかり会えたらいいなと思っています。

モノログ、その後。

A.I

「見る／見られる」、「見せる／見せられる」の関係性について、ずっと話していたような気がします。この頃は「見合う」、あるいは「聴く」、そんなことについて考えています。舞台に立つということは、見られに行くこと、見せに行くことで、舞台を観に行くということは、見に行くのと同時に、見せられにいつているということ。舞台と客席の関係でいえば多くはそうなるけれど、日常的にはどうだろう、私たちは見合ってはいないだろうか。見合うことによってお互いの存在を確認し、お互いの反応を確認し、反応を返す。そのコミュニケーションは強く、身体の数値に基づいている気がする。

私は、舞台と客席の関係を冷たいと感ずることがあります。見せた後のこと、見た後のことがドライに放置されている。それは悪いことではなくて、だからこそ作品が独立して人々に届くのであるし、そういう立場を保つことで可能になるコミュニケーションもあると思います。ただ…

と、書きながら、私は対話について書きたかったのだと気がつきました。見合うコミュニケーションとは、対話のことのようです。私は、作品が一方的に話している間、最後まで聴こう、と努めます。時間をかけて、一生懸命話している作品に耳を傾けて、私も時間をかけて一生懸命受け止めたいと思う。そして、できることなら応答をしたい、と考えます。それはもしかししたら、間に長い時間を置いた対話なのかもしれない。だとすると、作品を観終わった後のことを放置する可否かは、応答をする側である私が決めるのだ、などと。そう考えると、一時的に「見る／見られる」の関係になっていた舞台と客席の関係は、演劇が終わった後の時間

で「見合う」関係になることもできるのか。いや、しかし「見合う」というのは本来時間差を置かないものだな、とも思うので、対話はできても「見合」ってはいないかもしれないですね。

「見る／見られる」あるいは「見合う」という時には、人と人の目、身体同士の関わり合いが不可欠であるように思います。だとすれば、やはり対話と「見合う」は少し違うのかもしれない。「見合う」ことは、目によって強く認識され合うお互いの身体とそのやりとり。しかし、目は常に必要なものだろうか？なんて考えて。ダイアログ・ネクストでの対話を思い出します。

対話をするとき常に、途轍もなく膨大な他者が目の前にいて、互いにそれを感じながらなんとか歩み寄っていくような気持ちがありました。そしてそんな他者のようなものが自分の中にもあって、それともコンタクトをとっている。その時私は、必ずしも目を開けていなかったのではないかと思います。むしろ、目を瞑りながら手を伸ばして触ったり耳を澄ましたりしていたような気もするのです。でも時折目を合わせて、ぱちりと存在を確認していた、そんな感覚。そう考えると演劇も、日常の身体も、目のような強くて少し怖いような関係を結ぶだけではなくて、また違った関係の結び方があると考えてみたいと思いました。作品との長い対話の話はどこ行ったの？文字数が足りない。

しかし、こんな風に "I'm thinking now." というスタイルで、活字になる文章を書くのは如何なものか、と思いますが、ダイアログ・ネクストでの感覚はこんな感じだったから、いいか……と思いながら、command+S を押しています……。

言語化するための自信、安心感

H.W

帰り道、20 分は歩いた。人と話すのって、こんなに幸せなことだったのかと噛み締めながら、歩いた。連絡先は交換しなかった。また絶対どこかで会う気がしたから、そんなものは必要なかった。

対話を成立させる材料として、「安心感」が必要なのだと知った。小学生の頃、運動会や遠足、音楽会など、ことあるごとに感想文を書かされていたが、私にはその時間がただただ憂鬱なものでしかなかった。静かな教室で、自分以外のクラスメートは鉛筆を持つ手をひたすら動かす中、私は何を書けばいいのかわからないまま 45 分間を過ごし、休み時間を知らせるチャイムが鳴ってからようやく「楽しかったです」「よかったです」「～と思いました」というテンプレを文末に使って行を埋めるのに必死だった。ダイアログ・ネクストでみんなと話していると、ふとそんな苦い過去を思い出した。あの時の私には、対話が必要だったのではないかと。

このプログラムに参加した動機は、別に大したものではない。勉強になりそうだな、くらいの軽い気持ちで、これといって成し遂げたいことも、なりたい自分の理想像なども特に持ち合わせていなかった。演劇に興味がある人たちが集まっているとはいえ、それぞれが日頃学んでいる分野は多種多様であったし、何らかの目標を持って参加している人もいて、最初の自己紹介の時

は少し気が張っていた。だが、回を重ね、対話を重ねていくごとに、それぞれの言葉から気づきや発見を得ることも多々あり、それが少しずつ、自分の中で消化され吸収されていくのを実感した。吸収したものを、アウトプットし、それが誰かのインプットとなり、アウトプットされ……という循環が生まれるようだった。そして、この対話の場では、自分の感じていることや考えていることを、きれいに言語化しようとしなくても、とりあえずモヤモヤのままの言葉として出してみてもいい、という安心感に救われた。とりあえず口に出しているうちに形になってくることもあるし、自分のモヤモヤを整えてくれる人が周りにいるのだという安心感。10 年前にタイムスリップして、小学生の頃の自分と対話したい。一人で頭を悩ませる必要はないのだと教えてあげたい。

自分の意見を言うことは、勇気がいる。SNS で誰もが簡単に発信者になれる時代であっても、いや、だからこそ、自分の感じていること・考えていることを言語化することに慎重にならざるを得ない。しかし、そこで臆病になってしまっただけは意味がない。自信を持って、言葉を外に出せるようになるためには、対話が必要なのではないか。そんなことを気づかせてくれた 1 ヶ月でした。

thinking aloud

Y.K

私はこのプログラムに参加する前、大学に合格したのに登校できない、同期に会えない、行事はなくなり、ずっとオンライン授業という生活で、悶々とした中にいました。しかし後期に入るタイミングで上京し、何かにチャレンジすることで新たに人と出会い、様々な刺激を受け、画面上ではなく実際に体験することをしたいと思って参加しました。

そして私はダイアログ・ネクストに参加して、非常に濃密な時間を過ごせたとともに、「対話」の持つ可能性を実感することができました。

まず、鑑賞した作品はどれも卒にとらわれない、私にとって新感覚のものばかりでした。そのため、初めはある種の分からなさに対してどう対応すればいいのかわからず、頭の中がごちゃごちゃになったりもしましたが、感じたこと思ったこと考えたことをなんとか少しずつ言葉にしていき、共有して、咀嚼していくうちに、その分からなさを面白く思う感覚が自分の中に出てきたことを感じました。また、疑問に思ったことを率直に話してみると意外と同じような疑問を抱いた人もいることがわかり、分からないことは恥ずかしいことではないというようにも思いました。そして、観賞後に演出家の方々に直接お話を聞ける機会も非常に貴重なものでした。どの方も私たち学生に対して真摯に問いかけに答えてくださり、様々なヒントやキーワードとなる言葉をもたらすことができました。

また、最後の振り返り会では、今まで行ってきた「対話」についてチームで「対話」しました。そこでは、潜在的なモヤモヤを言語化していくプロセスについて

や、より良い対話の場を作るにはどうしたらいいのかについて考えました。

- モヤモヤをとりあえず言葉に“翻訳”して、話しながら考え、考えながら話す。または、イメージを形に表してみる。
- モヤモヤにいろいろな言葉を試着してみて、ピタッとくる言葉を探す。
- 沈黙を恐れずに自分自身と対話する時間もとる。
- 話を聞きながら閃いたこと、思い出したことを対話の場に投げることで化学反応が生まれることを待ってみる。
- みんなでパズルのピースを持ち寄って、物事の輪郭と一緒に捉えようとしてみる。
- 共感ではなく、納得を追求する。

など、対話をする上でのポイントになり得ることを考えることができました。

話し合いながら出てきたイメージを絵に書いたり、物体を使って表してみたりと途中行き詰まりながらも、あの手この手で発表の形にしたあの時間はとても楽しかったです。

今後はダイアログ・ネクストで得たことを生かしながら、また様々なことにチャレンジしていこうと思います。最後になりましたが、対話の場がよりスムーズに進行するようにサポートしてくださった中尾根さんをはじめとする講師、スタッフのみなさん、そしてパンデミックが起こった年であっても開催してくださったこと自体に感謝します。ありがとうございました！

「ダイアログ・ネクスト」がくれたもの

Y.W

コロナ禍を受けてサークル活動が制限されるようになり、観劇以外で演劇に関わるのが難しくなっていました。そんな時にダイアログ・ネクストの募集を見つけ、観劇を通して対話するという今までに見たことのない形のワークショップに興味を惹かれました。

今まで色々な舞台を見てきて、感想を書き留めたり、SNS にあげたりもしましたが、あえて表面的なことしか言葉にできませんでした。自分の解釈や意見がもし間違っていたらと思うと怖かったし、分からないと思うことがあればそれは自分の力不足で、悪いことだと思っていたからです。自分の考えに自信が持てなかった。だから最初は、「思ったことを自由に書いてみてください」がとても難しく感じました。『わたしたちは、そろっている。』を見た後に書いた感想の紙は、無理に場所を埋めようとしていたことをよく覚えています。

しかし対話を繰り返していくうちに、「わからなくても、まとまっていなくてもいい」「言葉にならなくてもいい」という安心感が、徐々に実感として湧いてくるのを感じました。『ムーンライト』の感想の紙には、小さな字の言葉が、A4 の紙の半分もないスペースにばらばらと並んでいただけでしたが、もうそれを後ろめたくは思いませんでした。書いた言葉は少なくとも、書けなかった気持ちを話したり、その後の対話で新しい考えが生まれたり。最初は難しかった「思ったことを自由に」が、少しずつできるようになったのではないかと思います。

一番大きかった学びは、『Berak』を鑑賞した後の対話で、自分の中にある、自分でも知らなかった考えや

感情に気づけたことです。その考えは自分にとって持っていたくなかったもので、対話の中でそれに気づいたときはとてもショックだったし、落ち込みました。でも、そうして自分の知らない自分を発見することこそが対話の目的だと知り、今ではとても良い経験をしたと思っています。参加者のみんなとの対話がなければこの気づきのきっかけとなる意見は出てこなかったし、それを作り手の方に質問しなければ、気づかされることもなかった。対話でしか起こり得なかった、貴重な気づきでした。

もうひとつ、大きな学びだったのは、舞台芸術への関わり方の多様さを知れたことです。進路を考える時期になり、自分が何になりたいのか、どういう風に舞台に関わっていたいのか、ずっと悩んでいました。もちろん、今も悩んでいます。そんな中で、「フェスティバル／トーキョー」というイベントを知れたことで、すこし世界が広がった気がしました。アートにできることは、きっと今私が思っている以上にたくさんある。自分の中の選択肢は、これからも増やしていきたいです。

ダイアログ・ネクストが終わって、対話の機会はすっかり減ってしまいました。舞台を観て深く考えることもひとりでは難しく、自分の意見を言うことも、また少し勇気のいる作業に逆戻りです。でも、自分の考えを持つことの大切さ、それを誰かと共有することでしか生まれないものがあることを、私は知っている。その経験はこの先ずっと、私の背中を押してくれると思います。

この一ヶ月をつくってくださったみなさんに、心から感謝したいです。ありがとうございました。



H.I

いつも何を話せばいいのかわからない。

言葉を発するまでの、脳から口までには実際以上の距離があって、それなのに状況は途方ない情報を持ちながら、追いつくことなど到底できないような速さで過ぎ去ってってしまうから、なんとも言えない何かがつっ掛かったままで終わる。「言葉が溢れてくる」なんてことはなくて、それはただ堆積されていくだけのものだった。

「話す」ことは反射神経とか、運動能力に似ている気がしていて、それぞれに得意不得意があるしより細かく意思を伝えようとするには訓練を求められる。対人的な能力なのでひとりで訓練するにも限界があり、かといっていきなり実践してみてもやはり追いつけないし、相手にされないし、支離滅裂なことを言ってしまうのを自覚しながらもパニックになってそれどころじゃないし、上手くいかない。『ダイアログ・ネクスト』では共通の話題・空間・時間が明確に区切られていたからそういった訓練にとっても適した環境だった。

自分が出来なかったことは、話すことや話したいことの、ひとつひとつの情報の取捨選択だったのだと思う。

ひとつを切り捨てることが出来ないからそれを繋げる言葉を探す、そうしてる間に会話は展開していくからまたそこにも繋がる言葉を探す。繰り返しを経て大きく

膨れ上がった言葉をいざ吐き出そうとしても、何かつ外れな気がしてしまって、やめてしまう。タイミングを逃してしまっている気がしているし、何より結局何が言いたいのかわ自分でも分からなくなっている。

今回のプログラム中によく出てきていた「言葉を並べてみる」ということは、この、自分ひとりだとドタバタしてしまう作業を周囲に委ねることなのだったと思う。相手の言葉に応じる必要はなかったり、脈絡もあまり問われない。どの方向にも転べるからどの方向にも話しやすい。誰かが反応してくれた時に、話せることを話せば良い。そうやって繋がっていったやり取りが、オーバードライブしていきまた新しい繋がりを手繰り寄せていく。

対話は、個々人が一つのまとまった（完成した）意見や意思をぶつけ合うものではなくて、それぞれの感情や言葉を共有してすり合わせたり合わせなかったりすることで、何か別の活路を見出そうと模索する作業のことなのかもしれない。当たり前のことかもしれないし、思い返してみるとよく同じようなこと（誰が正解というわけではないんだよ、ということ）を学校の教員に言われてきた気がするのだけど、それを実際に体感して腑に落ちたことに、どこか救われたような気がした。

DNレポート

F.N

私がダイアログ・ネクストの存在を知ったのは、申し込み締め切りの前日でした。その頃私は、ずっと塞ぎ込んだまま毎日を生きていました。大学生生活を懸けていたサークル活動が思うようにできなくなり、心にぽっかり穴が空いたままどう埋めて良いのか分からなくて。それでも大学生生活の1/4年はどんどん過ぎていくし、周りは就活を進めている。多分、すごく焦っていました。どう一歩踏み出せば良いのか分からないけれど、何か、何か始めなきゃいけない、と。そんな私の目に飛び込んできたのがダイアログ・ネクストの案内でした。ずっと同じ環境に凝り固まって生きてきた私にとって新しい場所に飛び込むのは少し勇気のいることだったけど、とにかく今は飛び込んでみよう、と申し込みをしました。

プログラムの序盤は、やっぱり参加しない方が良かったのかもしれない、と実は思っていました。まだ会ったばかりの人たちを前にして、自分の意見をうまく言えるか分からなかったからです。でも、そんな不安は一瞬にして消えました。他の参加者のみんながあまりに素直で、まっすぐものを述べていたからです。あ、この人たちの前なら真面目に喋っても大丈夫だな、と思ってから、自分でもびっくりするくらいするする言葉が出てくるのを感じました。普段だったら少し気恥ずかしく

感じるようなことも、みんなとなら一生懸命語ることができて、お喋り大好きな私にとっては楽しくてしかたなかったです。

中でも一番印象的だったのは、モモンガ・コンプレックスさんの『わたしたちは、そろっている。』の観賞会と対話の会でした。これまでコンテンポラリーダンスを中心とした舞台を見たことがなくて、正直見る前は、自分が何か受け取ることができるのか不安でした。でもいざ見始めてみるととっても面白くて。このコロナ禍で離れてしまったなあと感じることばかりだったけれど、むしろ揃っていたこともたくさんあったんだなと気付きました。

みんなと対話をした帰り道、楽しかったなあと思い、ふと、ここに参加できたならコロナになったのも悪くなかったかもなあと思った自分がいました。びっくりしました。そんなこと思える日が来ると思っていなかったからです。なんだか目頭が熱くなって、同時に嬉しくなりました。一ヶ月間の短い出会いだったけれど、みんなと、作品と出会うことができて、幸せな一ヶ月間でした。またいつか、マスクをつけずにみんなの素顔が見れるようになった世界で、みんなに会えたらいいなと思います。一ヶ月間ありがとうございました。

ダイアログ・ネクスト レポート

Y.W

ある人の言葉を、ここ数日反芻している。「コロナはじきに、緊急的なイベントから私たちの日常になって、一般的な疑念になる。朝起きて歯を磨くように、あるいは東京の地下鉄が数分に一本時間通りに来るように、コロナがいる、これがあたりまえの常識になる。」四月頃の話だったと思う。

あれから半年経った。世界は確かに、コロナを中心に回っているし、それは太陽を中心に地球が回ることにくらいには当たり前になっているように思う。今回のプログラムも皆マスクをつけ、素顔を見る機会はほとんど無かったし、私も最終回を微熱で泣く泣く欠席した。一年前にこの体温(37.4だった)だったらどこへでもいけただろう。そんな生活は今ではあり得ない。(ちなみに何事もなく元気でした。)

コロナがなかったら、このプログラムには参加していなかった。コロナがなかったら、もっと当たり前で大学の慌ただしさに精一杯で、演劇や文化について思考することはなかった。コロナがなかったら、その考えを深めるために、不得手な対話がメインのこのプログラムに参加しようなんて思わなかった。変な因果だと思う。

人生でこれまでにないほど深く思考し、また、深い思考に触れた6日間だった。普段自分の世界を通してでしか見ない演劇を、他人の世界を通して見ることの面白さ、作り手の思考を覗く面白さ。各回のプログラムで発見や驚きの種類が違うので「面白い」としか表現できないのが歯がゆいが、そう、とても面白かった。

「なぜ自分は演劇が好きなのか」。このプログラムに参加するときに、志望動機にこう書いた。もちろん7日間で答えを出そうとは思っていなかったが、そのヒントとなるものをプログラムの中で見つけることが出来た。そしてそれとは別に、私はある一つの答えを出した。私が演劇を好きな理由は、そこに関わる人に熱量が感じられるからだ。今回数日間を共に

過ごしたメンバーはどの人もそれぞれに熱量があり、それを表現する言葉を持っていた。そして、(私にとって)正直未知の世界に近かったオンライン配信の公演やインタビュー形式の演劇などとまっすぐに向き合っていた。演劇初心者の私は、その熱量に度々圧倒された。作り手の人たちは私たち以上の熱量をもって公演を作っていたし、それを隠すことなく見せてくれたのも嬉しかった。そのような人々の熱量に魅了されて、私は演劇に入り込んでいったのかもしれない。そして、今回その熱量にふれあえたことが、私の心に強く残っている。

「伝える / 伝わる」ということについて、今回よく話した気がする。見えることだけが伝わるのか、どうしたら伝えられるのか、そしてそれをどう受け止めるのか。この情勢の下においてより複雑になった(複雑さが露呈した)このプロセスは、むしろプログラムを終えた今のほうが難しくも感じている。しかし、思えば活動の中で私たちは「対話」していた。なんども「伝える」事を試みていた。初めて会った赤の他人と、言葉をえらびながら表現活動をしていた。身をもって伝える難しさを感じたこと、そしてそれに向き合えたこと、さらに言えばそれに気づけたことは、答えを出すこと以上に有意義だったと感じた。

答えが出ていなくて感覚の話になってしまう。まとめの最終回に出れていれば少し違ったかもしれない。ただ、答えをはっきり出すとスケールが小さくなるような気がしてしまう。対話で深まった様々な問いは、問いのままにして抱えて持っておこうと思う。

最後に、そうはいってもやはり、私は生の演劇を見たいし、マスクを取った素顔の皆さんと対面でコミュニケーションが取りたかった。こんなことをいっては身もふたもない気がするが、正直な感想だ。だってマスクで表情わかんないんだもん。

「ダイアログ・ネクスト日記」

H.I

「私が作った紙粘土は平らすぎたな。」

これはダイアログ・ネクストが終わってから真っ先に思ったことだ。指の腹の跡だらけで均された私の紙粘土を見て思った。

HP でダイアログ・ネクストを紹介する文章を読んだときの脳みそが沸騰したような興奮は久々だった。『" 対話 " って何だろう?』という問いと、現実的に生活する私と非日常をもとめる私が乖離している感覚が嫌だ、という発言から私のダイアログ・ネクストは始まった。

モモンガ・コンプレックス『わたしたちは、そろっている。』の「ゆらぎ」を観劇後の初めての対話では、ばらばら過ぎる価値観に追いつくのに必死で、途中で対話の場に居ることを諦めそうになった。「異なる価値観」というやつを理解しているつもりだったことにかなり本気で落ち込んだ。でも、プログラムがひとつひとつ進行し、アーティスト達の「(お互いが考えていることなんて) " だいたい分かっていない " というのを分かってきた。」「そこにある " 溝 " を直視してもらいたい、埋めようとはしない」という価値観に触れて、なぜ「異なる価値観」に悶々としていたのか気づき出した。私はこれまで、他者は分かり合えると過信していたし、私とあなたの間、私と何かの間にある溝（違い）を埋められるかも知らないのに無理やり埋めようとしていた。そうじゃなくて、まず、ここにある溝がどのくらいの深さ

で、距離があって、どんな踏み心地なのかをちゃんと見つめることから始まると思った、対話も、対話じゃないことも。何となく、しかし、強く感じていた乖離している感覚は、溝を見ようともせずにそっぽを向いていたから感じていたのだと、今はわかる。

『ムーンライト』の観劇後、対話の場に慣れてきて、異なる価値観にも免疫がついてきて、他者の言葉にも納得できてるという実感と「何かおかしい。」とちょっとした焦りが生まれていた。対話をしているのに、していないような気がして悶々とした。『Berak』の鑑賞対話での「この劇を自分の目線で見てほしい。」という言葉も印象に残ったが、" 自分の目線 " という響きにまた悶々とした。そして、最終回の振り返り会、それぞれの紙粘土の作品発表会中の「トゲトゲを作っておく。」という言葉から、1 文目に書いてある感情を持つことになった。

ダイアログ・ネクストを通して、" 対話 " とは私の哲学とあなたの哲学を擦り合わせて、私とあなたの哲学が滲むところを見つけて納得する、という言葉で私は表現したい。これは最初の問いに対する答えにもなっている。そして、トゲトゲがある＝引っかかりがあるということは、自分の哲学がたしかに " ある " ということだと思っている。プログラム後半の悶々としていた感じや平らすぎる紙粘土は、自分の哲学がまだぼんやりとされていて成熟していないことの表れであり、私がこれ

から考えていく問いとなった。自分の哲学はきっと紙粘土のように柔らかいものであるはずだ。このプログラムに参加して、大きな変化が起きたかというとなんかことはなかったかもしれない、Zoom のミュートは軽やかに外せるようにはなったけれど。でも、対話の " 場 " は全肯定で満ち満ちていて、陽だまりのようでやっぱり好きだと思ったし、その " 場 " を作ってくれた参加者のみんな、スタッフのみなさん、アーティストの方達、作品たちにありきたりだけれど、すごく感謝している。成長した部分も出来るようになったこともあるけれど、参加する前の私の中にはどこを探してもなかった言葉や価値観が、参加した後の私の中には「ある」というのが一番たしかなことである。対話を重ねるごとに、装った言葉を自然と使わなくなったことに気づいたとき嬉しかった。「何か相手から言葉がぼろっと出てきたら、それに対して具体的なレスポンスを一生懸命、いっぱい返す。」この言葉は、悩みながらも、自分が納得するまで諦めずに丁寧に言葉を紡ぐことを大事にしたいと思わせてくれた。今回出会ったアーティストの方達にはそれぞれフラットさを感じて、フラットというものはただ均された平らではない、と気づかされた。

" 対話 " からはじまった関係ってすごく素敵で、その時間はきっと本当に面白くて楽しかった。これからこの関係がどうなっていくんだろうか、どこで繋がっていくんだろうかと私はワクワクしている。そこには少しの戸

惑いや不安もあるけれど。『ダイアログ・ネクスト』は私がこれから優しく抱えていきたい、たくさんの言葉や気づきを与えてくれた。でも、いまはぐちゃぐちゃしていてよく分からないんだけど、つかまえたいと思うこともいくつか与えてくれた。ここが出発点になった。私はこれからダイアログ・ネクスト中に度々出てきてずっと引っかかっている「越える（超える?）」という概念について考えたい。すぐにかけてしまう凝固まった価値観のフィルターをなるべく透明にして、自分の目線でモノをちゃんと見つめられるようにしたい。考えたことや見つけたものは、こんな時代だからこそ発信しなくちゃいけない。私はこれから自分の哲学をたしかなものに展げていきたい。そして、1 人で悶々としすぎてしまったときはまた対話の " 場 " で " 対話 " の力を頼りたいと思う。誰かが " 対話 " したいと思ったときは、対話の " 場 " を共に作れる私でいたい。

つぎに私が柔らかい紙粘土で、その瞬間の自分を表現するとき、その表面には突起があって、トゲトゲであってほしいな。そんな瞬間を想像して、考えるということ、言葉にするとことを続けていきたい。

(最後に、この文章はとても主観的で感情的で、誰かがくれた言葉はニュアンスになってしまっていることを許してほしい。)



総合監修:中尾根美沙子 サポート:望月玲奈、斉藤佳奈 記録写真:鈴木 渉 企画・制作:小倉明紀子、名取萌音(フェスティバル/トーキョー)
 インターン:菅野水紀、南澤まどか、森田諒一



フェスティバル/トーキョー 20

主催 フェスティバル/トーキョー実行委員会
 豊島区/公益財団法人としま未来文化財団/NPO 法人アートネットワーク・ジャパン、
 東京芸術祭実行委員会(豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、
 公益財団法人東京都歴史文化財団(東京芸術劇場・アーツカウンシル東京))

「トランスフィールド from アジア」助成

国際交流基金アジアセンター アジア・文化創造協働助成
 協賛 アサヒグループホールディングス株式会社

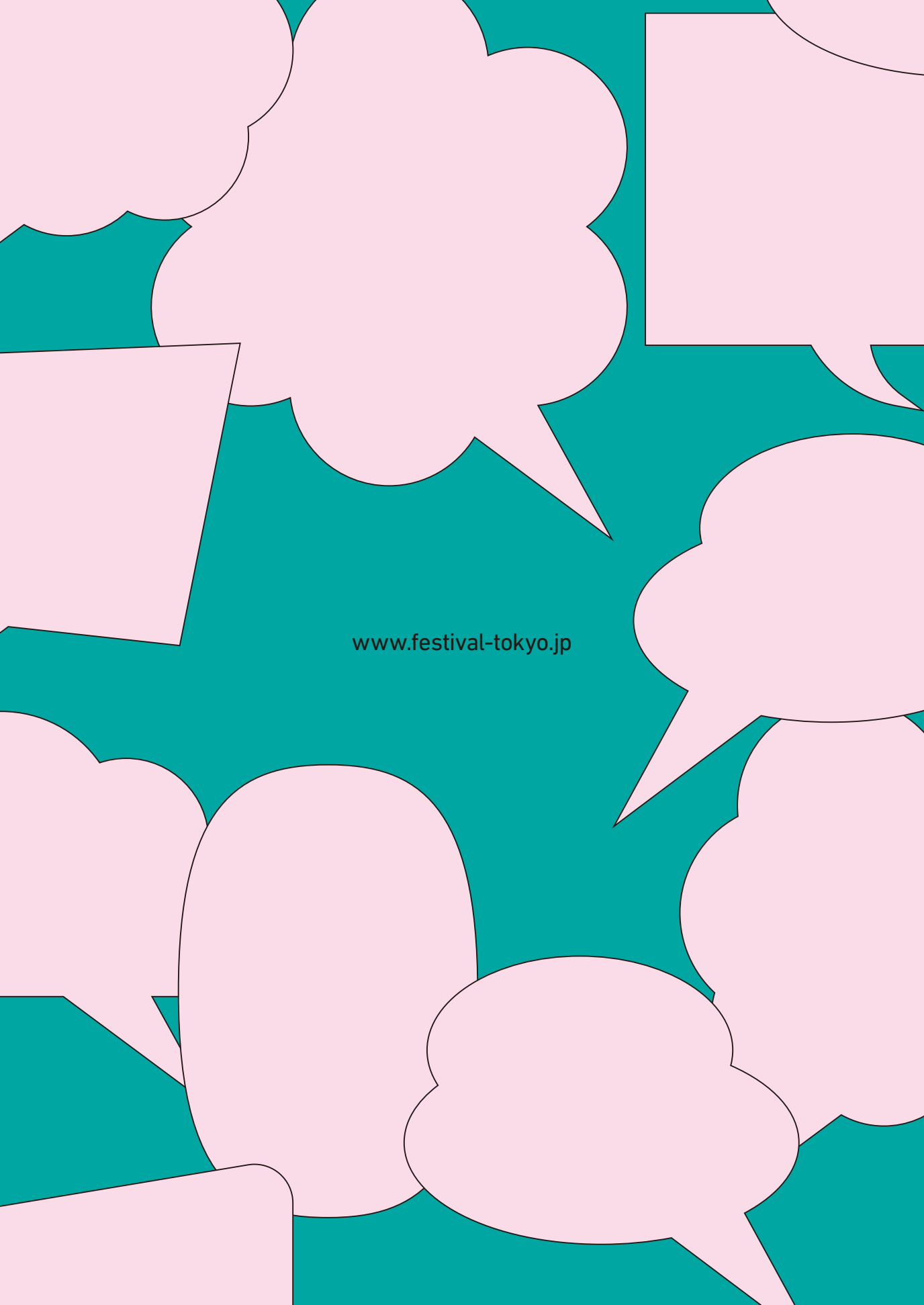


令和2年度 文化庁 国際文化芸術発信拠点形成事業 **文化庁**
 フェスティバル/トーキョー 20は東京芸術祭 2020の一環として開催しました。



発行・編集:フェスティバル/トーキョー実行委員会
 デザイン:阿部太一 [TAICHI ABE DESIGN INC.]
 発行日:2021 年 2 月 28 日
 禁・無断転載
 © フェスティバル/トーキョー実行委員会

【本書に関するお問合せ】
 フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局
 〒171-0031 東京都豊島区目白 5-24-12 旧真和中学校 4F
 TEL: 03-5961-5202 FAX: 03-5961-5207
 MAIL: toiawase@festival-tokyo.jp
 HP: <https://www.festival-tokyo.jp>

The background is a solid teal color. It is decorated with several overlapping, stylized speech bubbles in a light pink color. The bubbles vary in size and shape, some with long tails pointing towards the center, creating a dynamic and playful visual effect.

www.festival-tokyo.jp